岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第142号（2009）49－59

メタファーについて

瀬田　幸人

メタファー（metaphor）についての研究は，従来の詩的空想の世界における修辞的技法や表現法を離れ，言語学の分野において大きな関心を集めている。とりわけ，80年代に入ると，認知科学の発展とともに，メタファーは，人間の思考や概念構造といった観点から論じられるようになってきた。本稿では，アリストテレスの時代に遡る伝統的なメタファー論とLakoff and Johnson（1980）に代表される認知言語学におけるメタファー論を比較検討することによって，メタファーの本質に迫り，最終的に独自のメタファーの定義を提示する。さらに，メタファーの日英比較を基に，文化とメタファーの関係についても解明の糸口を探る。

Keywords：メタファー（隠喩），概念メタファー，イメージ・メタファー，
文化とメタファー，メタファーの日英比較

1．はじめに

どのような言語においても，1つの語で複数の意味・概念を表す現象は見られる。これは，限られた語彙でなるべく多くの意味・概念を表わそうとする，いわゆる「言語の経済性」と一般に呼ばれる原理によるものと思われる。ある語の基本的な意味に基づいて，すなわち基本的な意味を変化させることによって，新たな意味が派生されることは「意味拡張」(semantic extension) と呼ばれている。意味拡張の代表的なものとしては，「メタファー」(metaphor；隠喩)，「シネクドキー」(synecdoche；提喩)，「メトニミー」(metonymy；換喩) と呼ばれる比喩がある。

これらの中でも，特にメタファーと呼ばれる比喩についての考察は，遙か遠くアリストテレスの『詩学』に遡るといわれる。『詩学』では，比喩は（i）類で種，(ii) 種で類，(iii) 種で別の種，(iv) 比例関係，の4種類に大きく分けられており，(iii) と (iv) がメタファーにあたるとされる。[1] メタファーは，レトリックの伝統として中世ヨーロッパに受け継がれたが，20世紀に入ると再び関心を集めるようになった。哲学的メタファー論の研究が進み，特に80年代以降は，認知科学の発展に伴い，認知言語学の観点から精力的な研究がなされ，認知的な視点に立ったメタファー論は著しい発展を遂げてきたといえる。

本稿では，メタファーについて，その理論的な枠組みを明らかにした後，日英の比較を基に文化とメタファーの関係について論じる。

2．伝統的なメタファー論

瀬戸（1995: 4）は，「目玉焼き」や「メロンパン」の例をあげて，「メタファーとは《見立て》と考えれば分かりやすい」と端的な言い方をしているが，ここでは，まずメタファーについての伝統的な考え方について概観しておく。

Searle（1979: 85ff.）によれば，アリストテレスの時代から今日に至るまでのメタファー理論は，大きく「比較理論」(comparison theory) の系列と「意味的相互作用理論」(semantic interaction theory) の系列の2つに分類できる。[2]

アリストテレスやMiller（1993）等に代表される比較理論は，2つあるいはそれ以上の事物 (object) を比較したり，それらの事物の間に類似性 (similarity) を見出すものである。この理論によれば，"*S* is *P*" という比喩的陳述は，「*S*の*F*に対する関係が，*P*の*G*に対する関係と類似しているようなある特性*F*と*G*が存在する（There is some property *F* and some property *G* such that *S*'s being *F* is similar to *P*'s being *G*）」と分析されることになる。一方，

岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育学系　700－8530　岡山市北区津島中3－1－1
On Metaphor
Yukito SETA
Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama City 700-8530

Black（1962）等に代表される意味的相互作用理論は，２つの意味内容，つまり比喩的に用いられる表現の意味内容と文字通りの文脈での意味内容の間における相互作用を含むとするものである。別の言い方をすれば，喩えられるもの（＝主意（tenor））と喩えとなるもの（＝媒体（vehicle））が相互に作用して，共有の特徴を生み出すことによって主意の意味が変化すると主張する理論である。

Grady（1999: 87-89）は，下の(1)のような古典的な比喩表現を例にあげて，この種の比喩表現は，上の「比較理論」の枠組みでは説明できないとして，「類似の仮説」（resemblance hypothesis）を提案している。

(1)　Achilles is a lion.

Gradyによると，アキレスとライオンという２つの実体の間には比較理論が主張するような客観的な類似性，あるいは類似した特性（*F, G*）が元々内在しているとはいい難い，つまり，例えば「勇気」（courage）という特性が本来的にアキレスに備わっているわけではなく，同様に「勇気」がライオンらしさの本来の特性の１つでもない。Gradyは，そうではなく，「勇敢な人」（アキレスも含まれる）のスキーマ（BRAVE PERSON）と「ライオン」のスキーマ（LION）に類似した特性，例えば「勇敢な人」と「ライオン」は，ともに＜恐れないで危険な相手に立ち向かう＞という振る舞いが“知覚できる（perceived）”とし，(1)のような比喩表現を「類似メタファー」（resemblance metaphor）と呼んでいる。類似メタファーは，一般的に下の図１のように表わされ（一番下の節点（●）は，その上の事物の特性を表わす），(1)は下の図２のように表わされるとしている。

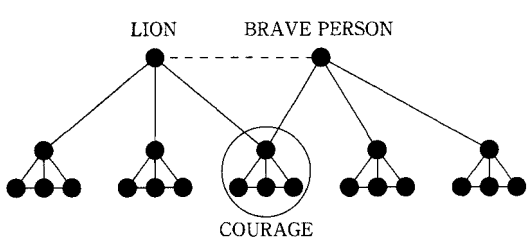

図１　類似メタファー

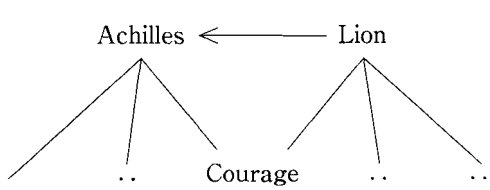

図２

ちなみに，Grady（同書：94-96）は，上で見た同一種類の事物間および概念間の類似に関係する「類似メタファー」の他に，違う種類の事物同士および概念同士の結びつきに関係する「相関関係メタファー」（correlation metaphor/correlation-based metaphor）と呼ぶメタファーを設定している。「相関関係メタファー」は，類似メタファーの場合に見られるような喩えとなる概念と喩えられる概念の間の共通特性というものはなく，下の（2a）のheavy burdenに見られるように，「重さ」（weight）と「困難」（difficulty）という２つの異なった概念が，（2b）のような「基本メタファー」（primary metaphor）と呼ばれるメタファーによって結びつけられている。

(2)　a. Caring for an elderly relative places a *heavy burden* on a family.
　　b. DIFFICULTIES ARE BURDENS

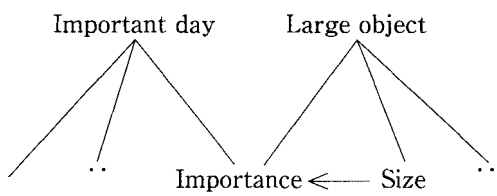

図３

３．認知言語学におけるメタファー論

メタファーを認知という観点から捉えようとした先駆的な研究が Lakoff and Johnson（1980）であり，後に「概念メタファー」（conceptual metaphor）として知られるようになったメタファーの導入など，その後のメタファー研究の発展に大きく寄与した。Lakoff and Johnson（同書：3-4）は，メタファーは言葉遣いだけに限られているのではなく，思考や行動にいたる日常生活のあらゆる部分に浸透している，言い換えれば，我々の日々の活動は，思考を支配しているさまざまな概念（concept）によって規定されており，この我々が日常用いている概念体系の大部分が本質的にメタファーによって成り立っていると主張する。

彼らは，「メタファーの本質は，ある種の事がらを別の事がらを通して理解し，経験することである」（p.5）と述べ，これについて説明するために下のような例をあげている。[3)]

(3)　a. You're *wasting* my time.（あなたは私の時間を浪費している）
　　b. This gadget will *save* you hours.（この機械

装置を使えば何時間も節約できる)

c. How do you *spend* your time these days? (最近どんなふうに時間を使っているの)

d. That flat tire *cost* me an hour. (あのパンクしたタイヤの修理に1時間かかった)

Lakoff and Johnson (同書：8-9) は，彼らの文化では時間は貴重なものであり，まるで「お金」であるかのように扱われる，つまり，TIME IS MONEY＜時は金なり＞ というメタファーによって，「時間」を概念化していると説明する。すなわち，メタファーによって，「お金」という概念（一般に「起点領域」(source domain) と呼ばれる）に基づき「時間」という概念（一般に「目標領域」(target domain) と呼ばれる）に構造を与え，理解しようとするメタファーが TIME IS MONEYなのである。彼らは，このようなメタファーを「構造のメタファー」(structural metaphor) と呼ぶ (p.14)。

構造のメタファーの例として，Lakoff and Johnson (同書：52-53) は，さらに THEORIES ARE BUILDINGS ＜理論は建造物である＞[4] を取り上げて，このメタファーは概念の一部分にしか構造を与えない，すなわち，ある概念を他の概念の理解に用いる場合に，概念の中に「使われる」(used) 部分と「使われない」(unused) 部分があると述べている。THEORIES＜理論＞という概念に構造を与えるために「使われる」BUILDINGS＜建造物＞の部分は，foundation (基礎) と outer shell (外郭) で，roof (屋根)，rooms (部屋)，staircases (階段)，hallways (廊下) は「使われない」部分である。従って，*construct (a theory)* ((理論を) 構築する) や *the foundation (of a theory)* ((理論の) 基礎) という表現は，メタファーによって構造を与えられた概念 (＜理論＞) の「使われる」部分の例であり，我々が日常使う「文字通りの」(literal) 言語表現ということになる。一方，下に見るような例は，＜理論＞という概念の「使われない」部分の例であり，文字通りの言語表現とはいえない。[5]

(4) a. ?This theory has no *windows*. (この理論には窓が付いていない。)

b. ?The *tenants* of her theory are behind in their *rent*. (彼女の理論のテナントは賃貸料が滞っている。)

Taniguchi (2005: 212) によると，Kövecses (2002) は，BUILDINGSの「部分的利用」(partial utilization) とTHEORIESの「部分的際立たせ」(partial highlighting) という概念を用いて，下の図4で示されるように，Lakoff と Johnson の指摘したメタファーによる概念の部分的構造化の特性を説明している。

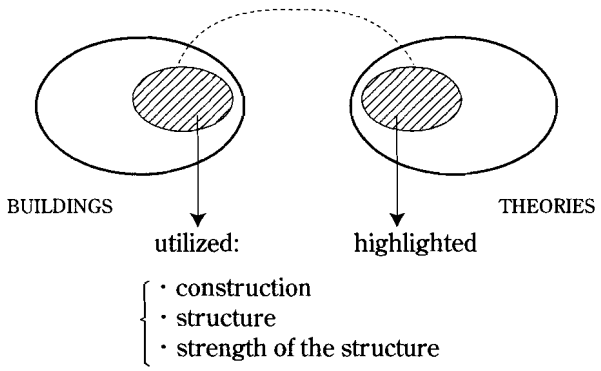

図4

Lakoff and Johnson (同書：14-21，25-32) は，構造のメタファーの他に，「方向づけのメタファー」(orientational metaphor) と「存在のメタファー」(ontological metaphor) を提案している。方向づけのメタファーとは，下の(5)のようなメタファーで，構造のメタファーの場合とは異なり，概念同士が相互に関係し合って全体としてひとつの概念体系を組織するものをいう。(5)では，「楽しい」という概念に「上」という空間的方向性 (spatial orientation)[6] が与えられている。なお，(5)から出てくる英語表現として，(6)－(7)などがあげられている。

(5) HAPPY IS UP; SAD IS DOWN ＜楽しきは上，悲しきは下＞

(6) a. I'm feeling *up*. (気分上々です)

b. My spirits *rose*. (気分が上がった (⇒元気が出た))

c. You're in *high* spirits. (上機嫌ですね)

(7) a. I'm feeling *down*. (気持ちが沈んでいる)

b. My spirits *sank*. (気分が沈んだ)

c. He's really *low* these days. (彼は最近本当に落ち込んでいる)

方向づけのメタファーとしては，(5)以外にも(8)など多くのものがあげられている。

(8) a. CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN ＜意識は上，無意識は下＞

b. HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN ＜健康と生命は上，病気と死は下＞

c. MORE IS UP; LESS IS DOWN ＜より多きは上，より少なきは下＞

d. GOOD IS UP; BAD IS DOWN ＜よいことは上，悪いことは下＞

存在のメタファーは，人間の肉体のような物理的な物体に係わる経験によって基盤が与えられるもので，出来事，活動，感情，考えなどを，存在物（entity）や実体（substance）として見做すメタファーであるとされる。例として下の(9)があげられ，(9)から出てくる英語表現として(10)があげられている。[7]

(9) INFLATION IS AN ENTITY ＜インフレは一つの存在物である＞

(10) a. *Inflation is lowering* our standard of living.
b. We need to *combat inflation.*
c. *Inflation is backing us* into a corner.
d. *Inflation makes me sick.*

(10)の例からも分かるように，インフレを一つの存在物と見做すことによって，インフレに言及し，数量化し，識別することができるのである。

存在のメタファーの中に，下の(11)－(13)のような英語表現が関係する「容器のメタファー」（container metaphor）と呼ばれるものをあげている。[8]

(11) a. The ship is *coming into* view.（その船は次第に視界の中に入ってきた）
b. I *have* him *in* sight.（私は彼を視界の中に持っている（⇒彼は私の見えるところにいる））
c. He's *out of* sight now.（彼は今，視界の外にいる（⇒彼はもう見えない））

(12) a. Are you *in* the race on Sunday?（あなたは日曜日のレースの中にいますか（⇒ レースに参加しますか））
b. He's *out of* the race now.（彼は今，レースの外に出た（⇒ レースから脱落した））

(13) a. He's *in* love.（彼は恋愛中です。）
b. We're *out of* trouble now.（私たちは今，もめごとの外に出た（⇒ もめごとが無くなった））

LakoffとJohnsonは，人間は肉体以外の世界を外の世界として経験するが，そのとき自分自身の持っている「内－外」という方向性を外界の他の物理的物体に投影するため，それらの物体も内側と外側を持った容器と見做すと主張する。(11)の英語表現は，VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS ＜視界は容器である＞というメタファーによって捉えることができるという。つまり，「視界」を仕切られた物理的な空間としての容器と見做している。(12)や(13)では，「レース」，「恋愛」，「もめごと」さえも「容器」として認識されることになる。

これに関連して，Lakoff and Johnson（同書：59）は，概念の基盤形成に関して非常に興味深い指摘をしている。彼らは，下の(14)の3つの例をあげ，「我々は主に，肉体的なものによって非肉体的なものを概念化する—つまり，輪郭がよりはっきりしたものによって輪郭がより不明瞭なものを概念化する（we typically conceptualize the nonphysical *in terms of* the physical—that is, we conceptualize the less clearly delineated in terms of the more clearly delineated）」と述べている。

(14) a. Harry is in the kitchen.（ハリーは台所にいる）
b. Harry is in the Elks.（ハリーはエルクス［米国の慈善保護団体］に属している）
c. Harry is in love.（ハリーは恋愛中です）

これらの表現は，それぞれ異なった領域の経験に言及している。(14a) は空間的（spatial）経験，(14b) は社会的（social）経験，(14c) は感情的（emotional）経験を表わしている。(14a) のINという概念は，メタファーによって構造を与えられた概念ではなく，明瞭な輪郭を持った空間の経験から直接現れるが，(14b) と (14c) の場合は，メタファーによって構造化された概念ということになる。例えば，(14b) のthe Elksは，SOCIAL GROUPS ARE CONTAINERS ＜社会団体は容器である＞ というメタファーによって空間的概念として構造が与えられることになる。

上で見たような「上－下」，「内－外」といった空間的方向性に基づくメタファーは，人間の肉体が基盤となっていることから，§5で述べるように，文化を超えた普遍的なものだと考えられる。

4．メタファーの構造と定義

メタファーの構造については，Lakoff (1993: 245) が認知意味論の観点から，以下の8項目をあげている。

(15) a. メタファーは，ある概念領域から別の概念領域への写像（mapping）である。
b. そのような写像は非対称的で部分的である。
c. それぞれの写像は，起点領域の存在物と目標領域の存在物の間の存在論的対応関係の

不変集合である。

d. それらの不変対応関係が活性化されると，写像は起点領域の推論パターンを目標領域の推論パターンに投影する。

e. メタファー的写像は「不変性の原則」(the Invariance Principle) — 起点領域のイメージ・スキーマ (image-schema) 構造は，目標領域が内在的に持つ構造と矛盾しないような形で目標領域に投射される — に従う。

f. 写像は任意ではなく，肉体と日常の経験知識の中に確立されている。

g. 概念体系には，概念体系の高度に構造化された下位組織を形成する，非常に多くの慣習的なメタファー写像が含まれる。

h. 写像には2つのタイプがある。それらは，概念的写像 (conceptual mapping) とイメージ写像 (image mapping) であり，両方とも不変性の原則に従う。

これらの8項目でまとめられている認知意味論の立場は，すでに見た伝統的な「比較理論」の流れを汲む立場とは，(「イメージ写像」というより)「概念的写像」という点で大きく異なっているといえる。認知意味論の枠組みにおける重要な概念である「写像」とは，「ある具体的な概念領域の推論パターンを別のより抽象的な概念領域の推論パターンに投射する」ということであり，これは，「比較理論」が主張するような「2つ (またはそれ以上) の事物の間に類似性を見出す」ことを意味しているわけではない。すでに見た Grady (1999) の「比較理論」への反論からも分かるように，2つ (またはそれ以上) の事物の間に類似性あるいは類似した特性が本来的に内在しているとする考え方には問題がある。もちろん，ある概念領域から別の概念領域への概念の写像が行われると，結果的には2つの領域においては類似した概念構造 (イメージ・スキーマ構造) が見出されることになる。

ところで，メタファーについては，すでに上で見た比較理論の場合のように類似性に基づく提案が多く見られる。例えば，籾山・深田 (2003: 76) は，メタファーを「類似性に基づき意味が拡張する比喩」と捉え，下の⑯のように定義している。[9]

⑯ 2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて，一方の事物・概念を表す形式を用いて，他方の事物・概念を表す比喩。

⑰ a. Aさんは職場の花だ。

b. 正月休みに食べすぎて，ブタになってしまった。

籾山・深田 (同書：74-76) は，上の⑰のような例をあげて，次のように説明する。(17a) は，「(植物の) 花」の持つ ＜植物が咲かせる美しく人目を引くもの＞ という意味に対して，＜美しく人目を引く人＞ という意味として比喩的に用いられている。つまり，「(植物の) 花」と「(職場の) 花」の間には＜美しく人目を引く (もの) ＞ という共通点が見られる。(17b) は，「(動物の) ブタ」の太っている (と考えられている) 体型と (17b) の文を発した人の体型の類似性に基づき，「ブタ」という語が＜太った人間＞という意味として比喩的に用いられている。

籾山と深田は，さらに，メタファーに基づく表現として「目玉焼き」を取り上げ，「目玉焼き」は「黄身と白身の配置を含む全体の形が，(人間などの) 目玉と類似していることに基づき成り立っている表現である」(p.76) と述べている。

しかしながら，籾山と深田の枠組みでは，⑯の定義のように「類似性」という観点に基づく限り，メタファーの本質を捉えるのは難しいといえる。上の⑮のまとめからも分かるように，メタファーは，ある概念領域から別の概念領域へ概念またはイメージを写像する，つまり，いわばある概念領域における概念またはイメージの推論パターンを別の概念領域へ転用することだと捉えるべきである。これに関連して，籾山・深田 (同書：78) は，Langacker (1987, 1999) に基づき，「2つの事物・概念の類似性に基づく (類似性を見出す) メタファーの基盤となる最も基本的な認知能力は，我々のもつ2つの対象を「比較する」という能力である」と述べているが，「比較する能力」ではなく「推論形式を転用する能力」として捉えるべきであろう。

ここまでの議論を踏まえて，以下にメタファーの定義として代案を示しておく。

⑱ メタファーとは，ある概念領域における概念またはイメージと結びつく推論形式を，別の概念領域に転用する認知能力。

ここでいう「イメージ」とは，視覚的イメージのような五感に関係するものを指す。また，形状などのイメージも概念と関係するため，概念領域に位置づけられるものと考える。

5．文化とメタファー

前節では認知言語学の立場からのメタファーについて見たが，実際，認知心理学や心理言語学からの

多くの経験的証拠によって「概念メタファー」という考え方が心理学的に妥当であることが裏づけられてきたといってもよいであろう。[10] すでに見たように，概念メタファーは，具体的な肉体的経験を通して，いわば感覚運動的に精神の中に形成される経験的ゲシュタルト（＝イメージ・スキーマ）を概念基盤とし，別の領域のより抽象的な概念を認識する働きをするものと考えられている。しかしながら，心理言語学の枠組みでは，この（起点領域の）イメージ・スキーマ構造のメタファー的写像によって構造を与えられる抽象的な概念に対しては，個人独自の心的表示が与えられ，これらの表示は人々の精神における長期記憶の体系の一部として記号化されると考えられている。

Gibbs（1999: 153-154）は，メタファー研究へのこのような心理言語学的アプローチに対して，Lakoff and Kövecses（1987）の“anger”（怒り）に関する文化的スキーマの研究に言及して，文化への言及がない点，および文化がメタファー的思考を具現する際に重要な働きをすることについての認識が欠けている点を批判し，イメージ・スキーマは人間の肉体によって与えられるだけではなく，文化的な相互作用によっても形成されると主張する。Gibbs（同書：156-157）は，さらに，メタファーは我々が具体的に再び経験できる「肉体と外界の相互作用」（body-world interaction）から生じる一種の道具であり，単に長期記憶から呼び起こされるだけのものではないと述べている。Gibbsは，メタファーを，必要なときに誰でも使うことのできる公的表示（public representation）（心的表示（mental representation）に対する）として利用可能な一種の道具であると捉えている。これは，メタファーを個人レベルだけでなく，文化的レベルからも論じる必要があることを強調したものといえる。[11]

このように，メタファーは，個人レベルのものと文化的レベルのものを分けて考えるべきであることに関しては疑いの余地はない。しかし，さらに文化を超えた，人類に共通する普遍的なメタファーにも目を向ける必要があると思われる。すでに§3で見た，人間の肉体を基盤としたメタファー，とりわけ人間の直立した姿勢と密接な関係をもつ「上－下」という空間的方向性を基盤とするメタファーや，人間の身体を「容器」と見做して「内－外」という空間的方向性を基盤とするメタファーは，文化を超えた普遍的なメタファーだと考えられる。[12] また，人間の身体的な形状を基盤とした視覚に関係するイメージ・メタファーなども，この種のメタファーだと思われる。

6．メタファーの日英比較

ここでは，メタファーを視覚に関係する「イメージ・メタファー」と，概念に関係する「概念メタファー」に大きく2つに分けて見ていくことにする。[13]

6.1　イメージ・メタファーの場合

松本（2000）は，「釘の頭」，「船尾」，「魚の目」のように，身体部位詞を用いて物体部分を表わす比喩表現について考察している。彼は，身体部位詞の物体部分詞への比喩的拡張は，ほとんどの場合が類似性に基づく拡張であるとし，その類似性については位置，形状（形，大きさ），機能から定義している。この中では，視覚的イメージと密接に関係する「位置の類似性に基づく拡張」を取り上げる。[14]

(19)　a. 釘の頭，針の頭，鼻の頭，波頭
　　b. 語頭，文頭，年頭
　　c. 船首，機首

(20)　a. みかんの尻，鍋の尻，列の尻
　　b. 語尾，文尾，船尾

松本（同書：319）は，(19)の「頭（アタマ，カシラ，トウ）」や「首（シュ）」は，人間（あるいは動物）の頭の位置に基づいて物体部分への拡張が行われた例で，物体の＜最上部＞，＜最前部＞，＜突き出た部分の先端＞の意味として使われると説明している。一方，(20)の「尻（シリ）」や「尾（ビ）」の場合は，動物の尻や尾の位置に基づく拡張と考えるのが自然で，＜最下部＞や＜最後部＞を表わすのに使われると述べている。

では，これらに対する英語の表現はどうであろうか。(19)の「釘の頭」の場合は，英語でも同様に身体語彙の“head”が用いられる。「針の頭」の場合は，針が「留め針」（pin）なら“head”が用いられるが，「縫い針」（needle）なら“eye”が用いられる。しかし，「鼻の頭」と「波頭」の場合は，身体語彙ではなく，それぞれ“tip”，“crest”（峰，頂上も意味する）が用いられる。「語頭」，「文頭」，「年頭」の場合は，身体語彙は用いられず，「語頭／文頭」では“the initial position（of a word/sentence）”が，「年頭」では“the beginning（of the year）”がそれぞれ用いられる。「船首」や「機首」（この場合の「首」は＜頭＞を指す）の場合も“head”は用いられない。「船首」は“bow”，「機首」は興味深いことに“the nose（of an airplane）”のように別の身体語彙が用いられる。

(20)の「尻」や「尾」の場合は，不思議なことに「頭」の場合と違って，“buttock(s)”，“tail”のよ

うな身体語彙は用いられない。「徳利の尻」を“the undersurface［underside］(of a sake bottle)”と表現できることから，「みかんの尻」や「鍋の尻」の場合も“undersurface”や“underside”を用いて表現することは可能かもしれない。「列の尻」は“the end（of a line)”，「語尾」は“the ending（of a word)”，「文尾」は“the end（of a sentence)”，「船尾」は“stern”である。

以上の比較から，「直立した人間の身体全体」を概念領域（起点概念領域）とする場合は，「釘」は目標概念領域となりやすいため，日本語も英語も同様にイメージ概念の写像が可能であることが分かる。これは，前節で論じたように，立っている人間の姿は文化を超えて普遍的に同一の視覚的イメージを与えるからではないかと思われる。それ以外の「鼻」や「波」の場合は，イメージ概念の写像は日本語では可能であるが，英語の場合は不可能である。また，動物の身体については，「尻」や「尾」の例で見たように，日本語の場合は概念領域（起点概念領域）とすることができるが，英語の場合はそれができない。このことだけからすれば，人間や動物の身体に関するイメージ概念に関しては，英語よりも日本語の方が，基盤となる起点概念領域の種類が豊富であるといえるかもしれない。

松本（同書：321-322）は，さらに，下の(21)のような例をあげて，形状のみの類似性に基づく身体部位詞の拡張について考察している。[15]

(21) a. さいころの目
b. 網の目，裂け目，割れ目
c. 魚の目

松本によれば，(21a）は，「黒目の＜小さく＞＜丸い＞形状」，(21b）は「目の輪郭が顔の皮膚の＜穴（切れ目）＞であること」，(21c）は「魚の目の形状」に基づく比喩的拡張である。これらの「目」は，英語の場合はいずれも“eye”のような身体語彙は用いられない。ちなみに，「さいころの目」，「網の目」，「裂け目」，「割れ目」，「魚の目」は，それぞれ“the spots on the dice”，“the meshes(of a net)”，“a rent(in a cloud)/a rip(in a coat)/a crack(in the ground)”，“a crack(in pottery)/joint(in a rock)/a split(in wood)”，“a corn”である。このことから，英語よりも日本語の方が，顔の部位に関連した視覚的イメージをメタファーとして用いる傾向が強いといえるかもしれない。

6.2 概念メタファーの場合

6.2.1 日英に共通するメタファー

すでに§3で見たHAPPY IS UP; SAD IS DOWN ＜楽しきは上，悲しきは下＞ やCONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN ＜意識は上，無意識は下＞ のような，起き上がっている人間の状態を基盤概念とする「上－下」のような空間的方向性に関係するメタファーは，文化を超えた普遍的なメタファーと考えられるため，(22)－(23)に見るように，日英でも共通していることが分かる。[16]

(22) a. I'm feeling *up*.（気分上々です）
b. You're in *high* spirits.（上機嫌ですね）
c. I'm feeling *down*.（気持ちが沈んでいる）
d. He's really *low* these days.（彼は最近本当に落ち込んでいる）

(23) a. Wake/Get *up*.（起きなさい）
b. I'm *up* already.（もう起きています）
c. He *fell* asleep.（彼は眠りに落ちた）
d. He *sank* into a coma.（彼は昏睡状態に陥った）

同じく，「花」を用いた比喩は，花が存在する文化であれば広く見られると予想されるが，実際すでに見た「職場の花」は，英語でも“the *flower* of the workplace/office”のように“flower”（花）を用いて表わすことができる。[17]

「歯」に関係する慣用句の場合も日英で共通する。例えば，「歯を食いしばる」（＝つらさ・くやしさ・痛みなどをこらえる)，「歯を噛む」（＝くやしさ・腹立たしさなどに耐える）は，英語でも“set/clench one's *teeth*”，“grind/gnash one's *teeth*”のように“tooth”（歯）を用いて表わす。

「面目を失う」，「面目を保つ」の「面目」は ＜人にあわせる顔，体裁＞ という意味だが，英語ではそれぞれ“lose *face*”(=lose status or the respect of others)，“save（sb's）*face*”(=preserve one's/sb's pride or reputation）のように“face”（顔）が用いられる。これも日英でほぼ共通していると考えられる。

「首を縦に振る」（＝相手に同意・賛成の意を表わす）については，首を縦に振るジェスチャーの意味が日本文化と英米文化で異なるため意味も異なるが，「首を（横に）振る」（＝賛成しない；承知しない）に関しては，英米文化でも首を横に振るジェスチャーは「不賛成」を表わすため，英語でも“head”を用いて“turn one's *head* from side to side as a way of indicating 'no'”のような言い方が可能である。

「手」に関しては共通点が多い。例えば，「手を貸

す」（＝手伝う）は，英語でも“give sb a *hand*”という表現であるし，「お手上げ」（＝どうにもならなくなって途中でやめること）は，英語でも“throw up one's *hands*”（=give up in frustration）という。

「実を結ぶ」（＝努力の結果が現れる；成功する）は，英語でも“bear *fruit*”（=have or bring about a result, usu a successful one）のように“fruit”（実）を用いて表わす。

最後に，表現は同じでも意味が異なる例を見ておく。「羽を伸ばす」は，＜自由に伸び伸びと振る舞う；くつろぐ＞という意味であるが，英語では“spread one's wings”のようにほぼ同じ表現を用いるが，意味は＜（鳥が初めて巣から飛び立つことから）自分の能力を試してみる；全能力を発揮する＞のようにまったく異なる。

6.2.2　日英で異なるメタファー

「作家／芸術家／俳優の卵」に見られる「卵」は，日本語では文字通りの意味の「（ニワトリの）卵」を基盤概念とする比喩であるが，英語では“egg”ではなく，“a budding writer/artist/actor”のように，“bud”（つぼみ）と関連した表現が用いられる。

「頭」を用いた「頭を下げる」という比喩表現は，＜頼みごとをする＞，＜謝る＞という2つの意味があるが，いずれの意味も「お辞儀をする」という日本の習慣と関連があると思われる。そのため，このような習慣のない英米文化では，「頭を下げる」という比喩表現は“beg sb（to do）/ plead with sb（to do）”，“apologize”のような“head”とは無関係の表現を用いることになる。「頭が低い」という比喩表現も「お辞儀」と深い関係があると思われる。この場合でも，英語では，“head”は用いず，単に“modest”，“unpretentious”などの形容詞を用いて表わす。

「足を伸ばす」という比喩表現は，＜楽な姿勢になってくつろぐ＞，＜ある所からさらに遠くまで行く＞を意味するが，前者の意味は，「畳に座る」という日本文化の伝統と関係があると思われる。それに対して，「椅子に座る」英米文化では，“stretch one's legs”という表現は，日本語の場合と異なり，＜（長く座っていた後で）散歩する＞（=“go for a walk as exercise, esp after sitting for a time”）というような意味となる。同じく，「足」に関する比喩表現に「足を引っ張る」がある。これは＜他人の成功や前進を妨げる＞という意味であるが，英語で“pull one's leg”といえば，＜人をからかう＞というまったく違った意味となる。

もう一つ「足」に関する比喩表現を見ておく。「足を洗う」という比喩表現は，＜悪い所行をやめて真面目になる＞という意味であるが，英語の場合は，同じような意味を表わすのに“leg(s)”の代わりに“hands”を用いて，“wash one's hands of～”（～から手を引く）という言い方をする。これも「靴を脱いで家に入る」日本文化と「靴を脱がない」英米文化の習慣の違いが，それぞれの比喩表現に反映した例といえる。

最後に，「尻」に関する比喩表現を取り上げる。「尻に敷く」という比喩表現は，＜妻が夫を支配する＞という意味であるが，英語では“buttocks”や“bottom”は用いず，単に“dominate（one's husband）”という言い方をするか，“keep（one's husband）under one's thumb”（（夫を）人（＝妻）の言いなりになった状態にしておく；（夫を）意のままにする）のような“thumb”（親指）を用いた慣用表現で表わされる。この例も「足を伸ばす」という比喩表現と同様，「畳に座る」という日本の習慣と深く関係があるように思われる。というのは，文字通りの意味で人（＝夫）の上に座るには，椅子の上ではなく畳の上でなければ，物理的にその状況を作り出すことはできないからである。[18]

7．結語

本稿では，まず伝統的なメタファー理論のうち，今でも一般に広く支持されている比較理論を取り上げて検討した。Grady（1999）の類似メタファーに言及することで，類似性に基づく比較理論の問題点を明らかにした。次に，Lakoff and Johnson（1980）に代表される認知言語学の立場からのメタファー論について概観し，概念メタファーという考え方の妥当性について論じた。続いて，Lakoff（1993）に基づき，メタファーの構造について検討し，メタファーの本質を明らかにしようとする試みとして，独自のメタファーの定義を示した。

さらに，文化とメタファーの関係について論じ，メタファーは個人レベル，文化的レベル，普遍的レベルの観点から分析すべきであると主張した。最後に，メタファーをイメージ・メタファーと概念メタファーに大別し，それぞれについて，いくつか例をあげて，日英の比較を行なった。その結果，比喩表現の中には，文化を超えた普遍的と考えられるものも，文化的要素と深く結びついていると考えられるものもあることが明らかになった。

このようなメタファーに関する日英の比較研究は，英語教育の分野，とりわけ日本語を英語で表わす英作文の指導において，文化的な視点を取り入れることがいかに重要であるかを示唆している。実際，

メタファーをめぐる英語教育の問題については，興味深い点が多く，今後の研究課題としたい。

注

1）瀬戸（2002: 17）を参照。

2）Searle（同書）は，この分類の仕方をM.C. Beardsley（1962）"The Metaphorical Twist," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 22に基づくとしている。

3）(3)はpp.7-8より一部引用。

4）Grady（1997: 46）は，このTHEORIES ARE BUILDINGSというメタファーの不備を指摘して，これはさらに下の2つの基本メタファーに還元されるとする。

(i) a. ORGANIZATION IS PHYSICAL STRUCTURE

b. VIABILITY IS ERECTNESS

5）(4)はGrady *et al.*（1996: 178）より引用。

6）空間的方向性には，「上－下」（up－down）の他に「内－外」（in－out），「前－後」（front－back），「着－離」（on－off），「深－浅」（deep－shallow），「中心－周辺」（central－peripheral）があげられている。Lakoff and Johnson（同書：14）を参照。

7）Lakoff and Johnson（同書：26）より引用。

8）Lakoff and Johnson（同書：29-32）を参照。

9）彼らは「「類似性に基づく」というのは，2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも，人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である。」（p.76）と述べているが，これはGrady（1999: 89）のいう「類似の仮説」（resemblance hypothesis）と考えられるが，この点については後ほど触れる。

10）例えば，Gibbs（1994），およびGibbs and O'Brien（1990），Gibbs and Nayak（1991），Nayak and Gibbs（1990）などのイディオムをめぐる一連の実験などを参照。

11）Kövecses（2003: 319）も，文化独自の考え方の違いによって概念メタファーの言語表現が左右されるかもしれないと述べている。

12）瀬戸（1995: 73-74）の「一般認識メタファー」も，ここでいう文化を超えた普遍的なメタファーとして捉えることができるかもしれない。瀬戸は一般認識メタファーの中に「擬人的メタファー」などを含めている。瀬戸のメタファーの分類については注13）を参照。

13）瀬戸（1995: 68-74）は，メタファーを「悟性的メタファー」と「感性的メタファー」の2つに分類している。悟性的メタファーは，精神的認識に係わるもので，さらに「一般認識メタファー」と「個別認識メタファー」に分けられる。一方，感性的メタファーは，身体的知覚に係わるもので，「外部感覚のメタファー」と「内部感覚のメタファー」に分けられ，「視覚のメタファー」に代表される「五感のメタファー」は，外部感覚のメタファーの中に位置づけられている。

14）(19)－(20)は，松本（2000: 319-320）から部分的に引用した例である。

15）その他にも，「ギターの爪」，「くしの歯」のような機能の類似性に基づく拡張，「手首」，「瓶の口」のような複数の類似性が絡んだ拡張，「背広の肩」，「手袋の指」のような関連性による拡張，など興味深い比喩的拡張について考察しているが，本稿では紙幅の関係で触れないことにする。

16）(22)－(23)は Lakoff and Johnson（1980: 15）より引用。

17）この節および次節の日本語表現の意味や英語表現については，『日本語大辞典』（講談社），『広辞苑』［第五版］（岩波書店），『新和英大辞典』［第五版］（研究社），*The Newbury House Dictionary of American English*，*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (fifth edition)などを参考にした。

18）ここで取り上げたような身体語彙を用いた慣用句の例は，日本語においては非常に多く見られる。以下，星野（1976: 156）から代表的なものをいくつか引用してあげておく。なお，星野（同書：172-176）は，身体語彙を用いた表現を，意味を基準にして9つに分類して，豊富な例を提示している。

身体を張る／骨身にこたえる／身の毛がよだつ／しこりを残す／筋を立てる，筋を通す／肌に合う，肌に合わない／神経が安まる，神経が高ぶる／肩肘を張る／手がかり／お手のもの／手かせ足かせ／足並み／脛に傷もつ身／二股かける／尻ごみ／尻をまくる／腰をすえる／腹を立てる／腹におさめる／太っ腹／腑に落ちる，腑に落ちない／胸がすく，胸が騒ぐ／首っ丈／涼しい顔／顔を立てる，顔をつぶす／面（つら）の皮／鼻つまみ／歯が浮くような／口上手／口八丁手八丁／抜け目がない／目に入れても痛くない／長い目（で見る）／目ざわり，耳ざわり／耳寄りな（話）／石頭／後ろ髪をひかれる／血となり肉となり／身につく

参考文献

アリストテレス（著）／笹山　隆（訳注）（1968）『詩学』，研究社出版.

Black, M. (1962) *Models and Metaphors*, Cornell University Press, New York.

——— (1993) "More about Metaphor," *Metaphor and Thought*, 2nd edition, ed. by A. Ortony, 19-41, Cambridge University Press, Cambridge.

Gibbs, R. (1994) *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*, Cambridge University Press, New York.

——— (1999) "Taking Metaphor out of Our Heads and Putting It into the Cultural World," *Metaphor in Cognitive Linguistics*, ed. by R. Gibbs and G. J. Steen, 145-166, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.

Gibbs, R. and J. O'Brien (1990) "Idioms and Mental Imagery: The Metaphorical Motivation for Idiomatic Meaning," *Cognition* 36, 35-68.

Gibbs, R. and N. Nayak (1991) "Why Idioms Mean What They Do," *Journal of Experimental Psychology: General* 120, 93-95.

Grady, J. (1997) *Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes*, Doctoral dissertation, University of California, Berkeley.

——— (1999) "A Typology of Motivation for Conceptual Metaphor: Correlation vs. Resemblance," *Metaphor in Cognitive Linguistics*, ed. by R.W. Gibbs, Jr. and G. J. Steen, 79-100, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.

Grady, J., S. Taub and P. Morgan (1996) "Primitive and Compound Metaphors," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by A. E. Goldberg, 177-187, CSLI Publications, Stanford.

Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts*, ed. by P. Cole and J. Morgan, 41-58, Academic Press, New York.

星野　命（1976）「身体語彙による表現」鈴木孝夫（編）（1976）『日本語の語彙と表現』日本語講座4，大修館書店.

Johnson, M. (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*, University of Chicago Press, Chicago and London. [菅野盾樹・中村雅之（訳）(1991)『心のなかの身体』，紀伊國屋書店.]

Kövecses, Z. (2002) *Metaphor: A Practical Introduction*, Oxford University Press, Oxford and New York.

——— (2003) "Language, Figurative Thought, and Cross-cultural Comparison," *Metaphor and Symbol* 18-4, 311-320.

Lakoff, G. (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor," *Metaphor and Thought*, 2nd edition, ed. by A. Ortony, 202-251, Cambridge University Press, Cambridge.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago and London. [渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）(1986)『レトリックと人生』，大修館書店.]

——— (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books, New York.

Lakoff, G. and Z. Kövecses (1987) "The Cognitive Model of Anger Inherent in American English," *Cultural Models in Language and Thought*, ed. by D. Holland and N. Quinn, 195-221, Cambridge University Press, Cambridge.

Lakoff, G. and M. Turner (1989) *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, The University of Chicago Press, Chicago. [大堀俊夫（訳）(1994)『詩と認知』，紀伊國屋書店.]

Langacker, R.W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.1. *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.

——— (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.

松本　曜（2000）「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張—その性質と制約」坂原茂（編）(2000)『認知言語学の発展』，317-346，ひつじ書房.

——— (2003)「語の意味」松本曜（編）(2003)『認知意味論』，17-72，大修館書店.

Miller, G.A. (1993) "Images and Models, Similes and Metaphors," *Metaphor and Thought*, 2nd edition, ed. by A. Ortony, 357-400, Cambridge University Press, Cambridge.

籾山洋介・深田　智（2003）「意味の拡張」松本曜（編）(2003)『認知意味論』，73-134，大修館書店.

Nayak, N. and R. Gibbs (1990) "Conceptual Knowledge in the Interpretation of Idioms," *Journal of Experimental Psychology: General* 119, 315-330.

Richards, I.A. (1936) *The Philosophy of Rhetoric*, Oxford University Press, Oxford.

Searle, J.R. (1979) "Metaphor," *Expression and Meaning*, Chapter 4, 76-116, Cambridge University Press, Cambridge.

瀬戸賢一（1995）『メタファー思考—意味と認識のしくみ』講談社現代新書1247，講談社.
———（2002）「メタファー研究の系譜」『月刊言語』Vol.31, No.8, 16-23.
———（2005）『よくわかる比喩—ことばの根っこをもっと知ろう』，研究社.
杉本孝司（1998）『意味論 2 —認知意味論—』，くろしお出版.
Sweetser, E.E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.
高尾享幸（2003）「メタファー表現の意味と概念化」松本曜（編）（2003）『認知意味論』，187-249，大修館書店.
Taniguchi, K. (2005) "On Aspects of Metaphorical Mapping," *English Linguistics* 22, 205-231.
辻　幸夫（編）（2003）『認知言語学への招待』，大修館書店.